藤屋 侃士
（下松市幸ケ丘）

プロテスタントの教会（上）

～長崎巡礼⑪～

今回訪れた聖アウグスチノ修道会が司牧する長崎市の城山教会から「十七世紀の日本におけるアウグスチノ会士たち」という本が送られて来た。アウグスチノ会カナダ管区のハートマン神父が書いた歴史書だ。

送られてきた江戸時代の日本のキリスト教史ともいえる本

それによると、十六世紀末から十七世紀前半にかけての五十年間に、日本で活動したアウグスチノ会員は三十七人で、うち二十四人が殉教している。先に紹介したトマス金鍔次兵衛神父もその一人で、彼の一六三七年の殉教で会の日本での活動は途絶える。

当時の日本では宣教の中心はイエズス会で、一六四四年、イエズス会の日本人司祭、小西マンショの殉教によって日本には一人の神父もいなくなる。

それから二百五十年余、鎖国政策が改められ、再び宣教師が来日する。パリ外国宣教会が建てた長崎大浦天主堂で一八六五年に潜伏キリシタン（隠れキリシタン）が発見された。

サビエルのイエズス会からパリ外国宣教会まで日本にキリスト教を宣教したのはすべてローマ・カトリックの修道会であり、私は鎖国政策変更後、最初に来日したのはカトリックのパリ外国宣教会と思っていた。

ところがそれは間違いで、最初に来日したのはプロテスタントの教派であることを、巡礼前に読んだ本の中のエピソードで気づいた。

開国後、長崎市東山手に十字架のある建物が建てられた。それを見て潜伏キリシタンは密かにそこを訪れる。外国人宣教師は大変喜び、別れ際に「今度は家族と一緒に来なさい。私の妻も喜ぶでしょう」と言った。潜伏キリシタンたちはこれを聞いて「パードレ（神父）は独身である」と伝承されており、この外国人はパードレ様ではないと確信し、以後この教会には近づかなかったというエピソードである。

カトリックの神父は結婚しない。一方、プロテスタントの牧師は妻帯できる。潜伏キリシタンが訪ねたのはプロテスタントの教会だった。

サビエルが来日する二十八年前の一五二一年、ドイツの聖書学者、マルティン・ルターはローマ・カトリックのあり方に異を唱え、改革を求めたが、ローマ教皇は異端として彼を破門した。ここから宗教改革の端が始まる。

宗教改革支持者はプロテスタンス（抗議する人々）と呼ばれ、ローマ・カトリックとは別のプロテスタント教会が誕生する。

また、イギリスでは宗教改革とは性格を異にするが、国王ヘンリー八世の離婚問題に端を発し、一五三四年、イギリス国教会（日本では聖公会と呼ばれる）が誕生した。

しかし江戸時代にはプロテスタントの諸教会は来日していない。

宗教改革で有名なルター

幕末に横浜、長崎などの港が開かれ、外国人居留地に教会を建てることが認められると、ローマ・カトリックの修道会より先に来日したのはプロテスタントだった。

江戸時代からの潜伏キリシタンのまち、長崎にもカトリックより三年早い一八六二年にプロテスタントの教会が建てられたことを今回初めて知った。私はカトリックの井の中の蛙（かわず）であった。

（元山口放送取締役ラジオ局長）